
中二の俺の日常って大体こんな感じ

椎名 素一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中二の俺の日常って大体こんな感じ

【Nコード】

N4458BA

【作者名】

椎名 素一

【あらすじ】

ごく普通の中二とその友達、変人どもとの学年が上がるまでを書いた、ほんつとつに何も無い話。たまに何か起こる。

第一話（前書き）

自分の実際の生活をもとに書きました。

第一話

一月十一日水曜、Am:8時00分起床。

起床というよりかは叩き起こされたと言ったほうが正しい。いつもどおり母の怒声がこの家に響いていた。

「龍！ 起きな！ 朝やって言つとるやろ！」

この声に対して俺は、怠いを体現したような声でうめき声を漏らす。そう、俺の日常はいつもこんな感じ。

それに加え、冬休みが明けたばかりなのでより一層気怠かった。さらに、今年の冬休みは例年に比べ、かなり長くなったので、だらけ癖がついてしまっている。

「龍！ 龍！ 早よ起きな！」

「分かったよ……はあ、うるせえな」

いい加減母親の声もうるさくなってきたので、俺はそのそのと布団からはい出た。横を見ると、そこにいるはずの妹がいなかった。

どうやら先に学校に行ってしまったらしい。先に行ってしまったといっても同じ学校じゃない。ていうか学年が二年離れている、だから妹は小学生。

昔は俺のほうが起きるのが早かった。何で今こんなに駄目駄目なんだらう俺。

おっと、こんなことを考えていたら時間が無くなってしまったのではないかと、思い時計を見ると……えっと、さっき00分だったのに、今20分だ……わーすごーい時間の流れて早いね。

「……………」

うん、まだ間に合う。

朝の学活が始まるの40分だけとまだ間に合う。家から徒歩で20分近くかかるけど大丈夫。というわけで、落ち着いて制服に着替える。俺はチャラチャラしてないのでしっかりズボンにシャツを入れて、カーディガンの前のボタンもしっかり付けて、ブレザーの前のボタンもしっかりつけた。

瞬間、俺の体は目視出来ないほどの速さで動いた！ ……と、自分では思った。だがそう表現していいぐらいの速さだったと思う。

十秒で飯を食い、5秒で寝癖を直した。

学校に持っていくリュックサックに水筒をぶち込み、母親に一言。

「何でもっと早く起こしてくれなかったのさ！」

背中に母親の罵声を浴びながら家を出た。

「ふう……………ここまでくればいいだろう」

俺は誰にも聞こえないような声でひとり呟いた。実は家を飛び出してから、ノンストップで学校の近くまで走ってきたのだ。そのせいでついさつき、茂みに倒れ込んでしまった。そのまま動かないでいたら心配そうな顔をしたどこかしらのオッサンが「き、君、大丈夫？」と聞いてくるし……………ほんと体でも鍛えようかな。

と、左肩に衝撃を感じた。

左を見てみると、そこには俺と同じリュックサックを背負った友達がいいた。

「あ、お前か、直角」

「誰が直角だ！ もう直角なくなってるし！」

と、言いながら俺を殴ってくる永峯^{ながみね}。相変わらずスピーディーかつ、痛いツツコミだな。

今俺にツツコんできたこいつ、膝にオスグッド（膝の怪我）を抱えている。背はふつう、運動神経が普通より上、パチツとした目に普通の鼻、普通の口、普通の髪の毛の色、まさにノーマルキング。

名前は永峯……永峯……… 忘れたので聞いてみよう。

「なあ、お前の名前ってなんだっけ？」

「それが友達かよ！ 普通、友達の名前忘れるか」

「おう！」

「いやいやいやいや、そこ自信満々に答えたらダメだろ」

普段は俺が皆のツツコミ役なのだが、こいつと対峙してる時だけいつも俺がボケになる。こいつをいじり倒すのが一番面白いかもしれない、と思ったことまである。

「はあ、全つく……。和宏^{かずひろ}だ……」

「じゃあな、俺学校に遅れたくないから」

「え！？ ちよっ、ひど っ」

学校めがけて一目散にダッシュ。ダッシュしながら俺は思う。
やっぱ人をいじるのって面白いことなんだなっ！

俺は階段を駆け上がる。やばい太ももに乳酸がたまってきた。

何で「乳酸」って言うんだろうね、疲れてきたでいいのにね。まさか俺って……中二病？俺のクラスは7組、この階段を3階まで登って右に曲がるとすぐ目の前にある。

最後の一段を登って右に曲がる。

そして教室の入り口をくぐる。

そして息つく暇もなく、自分の席へダッシュ。そのまま滑り込み着席。そのままリュックを机の脇にかけ、机に突っ伏しブレザーを頭の所まで引っぱり上げて、目をつぶった。

完璧だ。完璧すぎる。これぞ中学一年の半イジメにあった時に生み出した安全に眠る方法だ！

……いやね、自分でも何言ってるかさっぱりなんですよ。でもこの体勢の時は学校で安心できるんですよ。

「はっあらりゅう」

「何で今バカにした風になった」

はらりゅうというのは俺のあだ名、最近は顔に雀斑があるというだけで「そばりゅう」など「松平」などいろいろ呼ばれている。

「え？ それ聞かなきゃわからない？」

「いや聞かなくても分かる。とりあえずお前を殺してもいいか？」

「え、え、え、え！ ちよ、ちよ、ちよ、ちよと待ってよ、何でだよ！」

「え？ それ聞かなきゃわからない？」

「いや、全然」

「殺ス！」

「えええええええつ！ ごめんごめんゴメス！」

「つまんねえし、イラツとさせたから殺ス！」

と、言っても暴力をふるう訳ではない。俺の決まり文句というや

つですよ。

だが友達 漆はビビりまくってずっと防御の姿勢をとっている。漆は吹奏楽部所属、ド下ネタ男、顔も平均点なのに彼女持ちという幸せなやつである。

「やらねえから心配するな」

「えっ、マジ？」

そういつて漆は顔を輝かせたのち、俺に向かって右手の中指を立ててきた。顔も少しキメ顔で。

……おおおおおおおおおおおっ！ いい加減イラツときたよお！

「今のやらなければ落ちるぐらいで済んだかもしんないのになぁ？
り、く？」

「マジでごめん、あはぁっ（キラッ）！」

「殺ス！！！！」

今まさに漆に飛びかかろうとしたとき、ガラガラッと扉を開けて担任の教師が入ってきた。と同時にチャイムが鳴った。

それと同時にクラスで騒いでたやつらもそくそくと、自分の席に着いた。

俺は、「後で覚えとけよ！」と小声で漆に死刑宣告した後、自分の席に着いた。

その後、俺は朝学活の途中で「アイツをボコしたところで俺の成績が下がるだけだよな」と気づいてしまったので、チョークスリーパーホールドをやるだけにしといた。

「ギブ……………ミーン……………本気で…落ちるから……………」

俺はな、小学生のころからチョークスリーパーだけは得意だったんだよ。力が弱い俺でも、これさえ使えばこっちのもんだったしな。で、チョークスリーパーから漆を開放することもなく。

「うーん、謝ったらいいよ」

と、言った瞬間。

「こんな状態で謝れるかあああああッ！」

「うおっ！」

と、すごい力で弾き返されてしまった。人間って死にそうになりたりするとバカ力が出るよね。ここまで考えた瞬間、背中に衝撃！痛い、床に打ち付けられるの痛い！

漆は床の上をのた打ち回りながら悶絶している俺を、哀れそうに見つめたのち。

「ごめんなさい！」

と、土下座してきた。

……………なんか俺が悪者みたくなってるよ！ やばいよ、周りの人の視線が痛いよ！

「い、いいから土下座するなって」

「本当にすみませんでした！」

やばい、周りの人の視線が鋭さを増したよ。え、挟られる！ 何

でこんなに心が痛い!?　なんで!?

「いやマジでいいから!　もうやめて!　このとうり!」

なぜか俺が土下座していた。体の慣れってすごいよね、怖い友達にいつつもやってたから染み着いちゃったんだろうね。

「はっ、雑魚は雑魚らしくそうしてな。ふううわッ!」

溍は俺が土下座したのを確認した瞬間、急に立ち上がって、反省のかけらもないことを言った。

もちろん俺はブチ切れだぜっ!　ベイバー!

「コ……コ……ス!」

俺って切れると身体能力飛躍的に上昇するんだよね。まずはスーパーアーマー、相手が殴ってきたても全く動じない。いや、かなり効いてるけどね。むっちゃ痛いよ。ただただのけ反らないだけだよ。あとは、足が速くなったり、殴ったら石に少しひびが入ったり。

その能力をフル活用して溍を狩ることに専念した。

俺が「トラエタ!」と言いながら溍を殴ったとき、惜しくも空振りして壁に当たったのだが、俺が殴ったところに少しひびが入ってるのを見た溍は。

「に、人間じゃねえ!」

と、一言残してもものすごい速さで、まるで瞬間移動並みの速さで逃げてった。

それを目視できる俺ってすごくない?　……勿論嘘だけど。

まあその後は何もなく、友達ねくらさかばしおの一人 根倉坂羽塩ねくらさかばしおが、通常の五十円より一回り大きい五十円を持っているだとか、これもまた友達の一人内田うちだいち対地の顎が長い、いわばしゃくれているのをいじつたりだとかで過ごした。

…… 実に何も劇的なことが起こらない学校生活だった。「湊殺人未遂」以外はだけど。

それとクラス、否。学校ナンバーワンのバカ、岩摩寛之いわまひろゆきが、数学の授業で「斜辺」のことを「ななめへん」と、読んだことは別だけど。

「帰るか」

「ああ、そうするか」

俺と根倉坂は下駄箱の真ん前にいる。……そこにおいて、なぜ今更「帰るか」と言ったのか自分でも不思議だったけどな。

そして歩き始めたのだが……遅い。とにかく歩幅狭い。うちのクラスでもマイペースなこと有名なのだが、こいつには友達と合わせるという概念が全っく、一ミリもないのだ。

「なあ、もうちょっと早く歩いてくれないか」

俺がこう言ったのは歩き始めてざっと20分近くたったころだ。本来ならもう家についているはずなのだが、こいつのマイペース思考がいろいろ寄り道させてくれた。

「そんな事より。こっち行ったらどうなるか知ってる？」

「いや、知らん。というか帰る」

「じゃあ、行こう」

「何だよ！ お前マイペースすぎるぞ！」

「麻衣ちゃんのペースだから『麻衣ペース』だよ！」

「今、日常ネタ持ってくるなよ！ いつからお前は麻衣ちゃんになつたんだよ！」

「今から」

「……………」

しばしば会話で心を折られながらも、今まで遠かった家の近くまで来た。はぁ、遠かった。

ていうか、疲れた。こいつの怒涛のボケラツシユにツツコミながら寄り道したんだから。ちなみに俺は学校ではツツコミの位置を獲得している。

「なぁ、俺のほうから帰ろうぜ。近いからさ」

「急にだな。ていうか、やだよ。今まで散々お前の寄り道に付き合ってきたんだから」

と踵を返し今歩いてきた道を戻る。実は根倉坂の家の近くまで付き合ってたんだよね。

「こっちのほうに近いぞ！ 俺を信じろ！」

「誰が信じるか！」

「信仰によつてのみ神に救われるんだぞ！」

「何の宗教だよ！ お前の家の道歩く宗教ってどんな宗教だよ！」

この後も、「こっちへこーい。いいものやるから」だとかで誘ってきたがそれを無視して家に帰った。

明日もこの変人どもと会うのか、と思うと気が重かった。

主人公：原田龍

・特徴がないのが特徴
レックスを抱えている

・真、ノーマルキング

・いろいろコンプ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4458ba/>

中二の俺の日常って大体こんな感じ

2012年1月11日23時49分発行